ロールシャッハ法の解釈の歴史
―法則定立的か個性記述的か―

中　野　明　徳*

ヘルマン・ロールシャッハはテストデータをコード化することで数量的分析を可能とし,「体験型」という心理的概念に到達した。ロールシャッハ法の解釈の歴史は，客観的な心理測定を目指す法則定立的（nomothetic）アプローチか，内容分析から臨床的に被検者の世界を明らかにしようとする個性記述的（idiographic）アプローチかで揺れてきた。法則定立的優位のベック法と個性記述的優位のクロッパー法が争う中で，エクスナーが両者を「包括システム」として統合し，さらに多量なデータを駆使して診断ツールとしての可能性を示したが，世界共通の包括システムの基準はないことが明らかになった。ロールシャッハ法は絵をみて言葉にするので，思考障害の査定として臨床的に有用である。ロールシャッハ法は診断検査から離れて，事例研究のように個人の理解とその援助に活用するときにその魅力を遺憾なく発揮する。そのためには人格理論や精神病理の学習は不可欠であり，ロールシャッハ法はこれを使用する者の理論に答えてくれる貴重なツールである。

〔キーワード〕ロールシャッハ法　法則定立的解釈　個性記述的解釈　包括システム

Ⅰ．はじめに

ロールシャッハ法は，スイス生まれの精神科医ヘルマン・ロールシャッハHermann Rorschach（1884-1922）が1921年に『精神診断学－知覚診断的実験の方法と結果』として公表したもので，10枚のインクのしみに対し「何に見えるか」を連想させて人格を査定する投影法である。しかし，彼が公表して９ヵ月後に亡くなったために，この研究の意図がどこにあるのか，どのような解釈をめざしたのかが明確でなく，謎として残ることになった（中野, 2004）。彼はロールシャッハ・テストを「知覚の検査」と呼んでおり,「投影法」という呼称はフランクFrank（1939）によるものである（Exner，1969）。

ロールシャッハの死後，このテストは先輩のオーバーホルツァーOberholzerに引き継がれ，彼はレヴィLevyを教育し，レヴィは1925年，アメリカにロールシャッハ法をもたらした。アメリカでは，1930～1950年代に５つの学派，すなわち，ベックBeck，クロッパーKlopfer，ハーツHertz，ピオトロフスキーPiotrowski，ラパポートRapaportとシェイファーShaferのグループが生まれた。彼らはいずれもロールシャッハとは直接的な交際経験がなく，それぞれがロールシャッハ・システムを開発したことから，エクスナーExnerはこれらを統合した「包括システム」を開発した。本稿では，ロールシャッハ法の解釈の歴史を概観し，あるべき活用法を考えてみたい。

Ⅱ．ヘルマン・ロールシャッハの生涯と業績

1．生涯

エランベルジェEllenberger（中井訳，1999）による伝記にしたがって，ロールシャッハの生涯を年表にした（**表１**）。父ウルリヒUrlichは平凡な装飾画家であったが，この職業に飽き足らなく，いい年をしてから美術工芸学校を卒業した。1886年にシャウハウゼンの男子初等学校と実科学校（大学進学を予定しない少年のための中高等学校）の図画教室に任命された。父は雇われ画家をしていたときに鉛中毒にかかり，その後遺症で亡くなっている。母フィリッピーネPhilippineは心やさしくつきあいのよい人であったが，ヘルマンが12歳の時亡くなり，父は妻の妹レギーナReginaと再婚した。義母は何でもできるエネルギッシュの人であったが，少年ヘルマンはこの義母と背を向け合ったといわれる。

ヘルマンの性格は友好的で距離を感じさせず，快活でユーモアがたっぷりあり，気分にむらがなく，バランスがとれていた。彼は1903年に学生連盟スカフュジアに加入したが，このとき学友からもらったあだ名は「クレックス」で，これは「インクのしみ」という意味である。彼はクレクソグラフィー（紙を折り合わせてからインクのしみをいじって蝶なら蝶に似せる）の達人だった。当時彼は美術をとるか自然科学をとるか迷っていたが，チューリッヒ大学に行って医学を学ぶことを決めた。チューリッヒ大学の精神科クリニッ

＊　福島大学総合教育研究センター・教育相談部門

表１　ヘルマン・ロールシャッハの年表

西暦	歳	出来事
1884	0	11月８日チューリッヒに生まれる。父ウルリヒ，母フィリッピーネ
1886	2	シャッフハウゼンに移る
1888	3	８月妹アンナが生まれる
1891	7	７月弟パウルが生まれる
1897	12	７月母の死
1898	14	国民学校卒業後，州立学校に入学
1899	14	４月父が母の妹レギーナと再婚
1900	15	３月異母妹レギーナが生まれる
1903	18	６月父の死，学生連盟に入会
1904	20	シャフハウゼン州立学校卒業，チューリッヒで医学修行（～1909）
1909	25	ミュンスターリンゲン州立精神病院に勤務。スイス精神分析学協会（～1913年）
1910	26	ロシア人オルガ・ステンペリンと結婚
1911	27	コンラート・ゲーリングとインクのしみを使った実験
1912	28	チューリッヒ大学オイゲン・ブロイアー教授の指導で医学博士を得る。「**反射幻覚とその類似現象について**」「反射幻覚と象徴」
1913	29	ロシアに長期滞在（～1914）
1914	30	７月スイスに戻り，ヴァルダウ病院勤務（～1915年10月），精神科医モールゲンターラーと親しくなる
1915	31	妻がロシアから戻る，ヘーリザウのクロムバッハ病院の上級医師になる
1917	33	娘エリーザベト生まれる。「スイスの宗派と宗祖に関する若干の考察」シモン･ヘンスがインクのしみ実験発表
1918	34	インクブロット・カードの作製
1919	35	息子ヴァディム生まれる。エミール・オーバーホルツッアーらと新しいスイス精神分析学会設立し，副会長となる。「スイスの宗派形成に関する付加的考察」
1920	36	「知覚診断的実験について」「**スイスの二人の宗祖（ビンゲリとウンターネーラー）**」
1921	37	６月『**精神診断学**』
1922	37	２月28日スイス精神分析学会で発表，４月２日死去（急性腹膜炎）

クであるブルクヘルツリ病院はオイゲン・ブロイラーEugen Bleuler教授によって，フロイトの無意識概念を受け入れていた。医学の勉強を始めて以来，ロールシャッハは精神科医になろうと考えていた。

彼はスイス連邦の医師免許証を獲得した頃，ロシアに魅了され，同級生のロシア女性オルガ・ステンペリンOlga Stempelinと婚約した。彼にはお金がなく，大学の精神科クリニックに行くよりも，ミュンスターリンゲン州立精神病院の助手に応募し，そして結婚した。彼は医学博士を得るためにブロイラー教授に「反射幻覚とその類似現象について」というテーマを申し出て，３年以上かけて完成させた。このころ，ロールシャッハは患者にユングJungの言語連想検査を使っており，インクのしみを使った検査と比較したいと考えていた。シャッフハウゼン州立学校の同級生であった小学校教師ゲーリングGehringがこれに関心を示した。この実験は1911年に２，３週間行われ，才能のある学童が豊かな想像力を示すかどうかを知ることであったが，論文としてまとまらなかった。ロールシャッハが次第に精神分析にのめり込んだからである。チューリッヒにはブロイラー教授やユングらが所属した精神分析グループがあった。

ロールシャッハは1913年からロシアに滞在し，モスクワ近郊のサナトリウムで職を得たが，満足できる学問的研究をやれる見込がなかった。彼は７ヵ月でスイスに戻り，ベルン近郊ミュンジンゲンのヴァルダウ精神病院で働いたが，第一次世界大戦のために妻はすぐに戻れなかった。この病院のモールゲンターラーMorgenthaler医師は精神病者の芸術作品を研究しており，後にロールシャッハの『精神診断学』の出版を助けた。医師ファンクハウザーは情動生活の理論を研究しており，ロールシャッハに色彩知覚と情動を連結する発想をひらめかせた。ロールシャッハは，この病院に宗教セクト（小会派）の教祖ビンゲリが1896年から1901年まで入院していたことを知り，自由時間の大部分を宗教セクトの研究に充てた。当時彼はこれが自分のライフワークだと信じていたといわれる。

ロールシャッハは1915年，妻がロシアから戻ってきたので，ヘーリザウにあるクロームバッハ精神病院の上級医師に応募した。彼はスイスのセクトに関する大著に没頭し，スイス精神医学会に研究発表している。エーミール・オーバーホルツァーEmil Oberholzerらが1919年に新しいスイス精神分析学会を創立し，ロールシャッハは副会長に選ばれた。彼はこの学会でもスイス・セクトの研究を発表している。

ロールシャッハに決定的な変化が起きたのは，ワルシャワ大学からチューリッヒ大学に留学してきたシモン・ヘンスSyzmond Hensが，独自のインクのしみテストを工夫して，1917年に医学博士論文を発表した時である。ロールシャッハは短期間で『精神診断学』をまとめて，1921年６月に出版し，1922年２月18日にスイス精神分析学会で最後の発表を行った。しかし，1922年４月２日に腹膜炎を伴う劇症の虫垂炎のために37歳で生涯を閉じた。

２．業績

ロールシャッハの精神医学論文から，重要なものをみていこう（Bash,1965）。

１）反射幻覚とその類似現象について（1912）

ロールシャッハが学生時代にはじめて死体の病理解剖に立ち会った時に，自分の脳が切られて切片になるのを感じる夢を見た。彼は生理学的にはあり得ないこの種の妄想知覚を人間が体験できるのはどうしてかに関心を向け，学位論文としてまとめた。反射幻覚（reflex

hallucination）はカールバウムKahlbaumによって導入され，現実の知覚ないし幻覚の後に反射的な速さで幻覚過程が生ずる現象をいう。例えば，砲声を幻覚的に聞いた患者が，実際に目に前にある塔が倒れるのを見た（幻覚）というものである。

ロールシャッハは何かを知覚した後に反射として生じる幻覚の例を多数集めて吟味した。知覚の別の感覚野への変貌可能性を問題にして，視覚が運動感覚に，運動感覚が視覚に，聴覚が運動感覚に，運動感覚が聴覚に変貌する反射幻覚を扱っている。この論文はブロイラーが説く観念連合心理学で説明されているが，後の『精神診断学』の基礎となるものであろう。

ロールシャッハは同時期に「反射幻覚と象徴」という論文を発表しており，学位論文と精神分析の新しいデータとを総合している。象徴は運動感覚的な素材とフロイト的ダイナミズムとの交叉点で現れ，運動感覚の素材がコンプレックスの影響を強く受けると，投射によって夢の象徴になるか，精神病においては反射幻覚になると考えた。

２）スイスの二人の宗祖（ビンゲリとウンターネーラー）（1920）

ベルン州出身のヨハネス・ビンゲリは1834年生まれで，４歳で母を失い，そのあとすぐに父は再婚し，生涯継母に辛辣であった。彼は幼児期から幻覚をもち，34歳になって幻覚体験が頻繁になり，自分と父親を守るために悪魔と闘い，結婚した1870年に小冊子『不思議な，まったく新しい精霊と奇跡の物語』がまとめられ，地方の名士になった。彼は「森の友の会」を組織し，1895年までに会員が93人になったが，娘との近親相姦の罪で逮捕され，1901年までミュンジンゲンのヴァルダウ精神病病院にいた。1903年に妻が亡くなったが，70歳をすぎて忠実な女性会員と再婚した。ロールシャッハはビンゲリが80歳のときに訪問して，1871年の「夢の旅」を聞いている。彼は白日夢の中で，自分をキリスト，母親をマリアと同一視して，自分と母親を神に高めることによって，近親相姦を正当化した。ミュンジンゲンでの診断は，「ヒステリーにおける現実的てんかん発作」であった。

ビンゲリは別の宗祖アントン・ウンターネーラーが創始したアントン教徒であった。ウンターネーラーは1759年生まれ，1788年に結婚しており，非常に多才な人で，人間や家畜に奇跡療法（感応療法）を施した。1800年，彼は宗教的な集会を催して聖書を解釈した。彼は最初の本『小審判書』を印刷し，この中でキリストとして，生者と死者の審判者として登場する。彼は確実に統合失調症の予言者であり，1802年以後に誇大妄想を形成し，20冊以上の本を書いた。

ロールシャッハが宗派研究をライフワークにしようとした深い理由について，バァッシュ（Bash, 1965）は，ロールシャッハがビンゲリに深い親近感をもったのだという。二人ともに母を早く失い，二人の父はともに再婚したが，早くに亡くなった。父ウルリヒの再婚相手は義妹レギーナであり，ここに近親相姦のモチーフがある。しかし義母はヘルマンに勉学の道を開いてやって，彼には転回点がやってきた。バァッシュは，ロールシャッハの両親が死んで学問の開始までの思春期（12歳～20歳）が危機的な内向相にあったとみる。２番目の内向相はロシアに長期滞在する時期（1913～1914年）であり，この頃からロールシャッハは空想に関心を寄せた。エランベルジュはロシア滞在の失望感は，再度の母の喪失だと指摘する。ユング派のバァッシュは，「宗派研究」と『精神診断学』は互いに補い合い，「宗派研究」が本来の「内向の仕事」であり，『精神診断学』は自己の運動感覚の研究に色彩が加わることによって「外向の仕事」になったのだという。さらに，ビンゲリはロールシャッハの「影」であり，ビンゲリの分析はロールシャッハの自己分析であったと指摘する。

３）精神診断学（1921）

ロールシャッハは1911年に行ったインクのしみ実験を放置していたが，1917年のヘンスの研究に刺激された。エランベルジュによれば，ヘンスは８枚の黒白カードを用いて，児童1,000人，正常成人100人，精神病成人100人を調査した。被検者はカードの回転を許されるが，ヘンスは反応時間を計測しなかった。ヘンスの目標は空想の研究であり，反応内容の分析を行ったが，正常成人と精神病成人との間に格別価値のある差を発見できなかった。被検者1,200人のうち，彼がコンプレックスを発見したのはただの２人であったという。

ロールシャッハは，1918年にインクブロット・カードを作製して，ヘーリザウの患者を使って予備実験にとりかかり，ヘーリザウの医学会に予備的報告を行った。しかし関心を示されなかったので，自分の発見を本にしようと思い，ロールシャッハ・カード15枚を添えて出版社に送ったがすべて断られたので，見直して図版を12枚に減らした。1920年に友人のモールゲンターラーが出版社ビルヒャーに掛け合ってくれたが，カードは10枚に減らされた。そればかりか，カードのサイズは小さくなり，色は変えられ，あちこちに濃淡が生じた。こうして難産の末，1921年６月に『精神診断学』が誕生した。これは健常な教養人55人，健常な無教養人62人，精神病質者20人，アルコール依存患者８人，軽愚・痴愚者12人，統合失調症患者188人，躁うつ病患者14人，てんかん患者20人，進行麻痺患者８人，老年認知症患者10人，動脈硬化性認知症患者５人，コルサコフ病患者および類似の患者３人，合計405人（男231，女174）の資料からなるものであった。

被検者は図版を一枚一枚手渡され，「これは何に見えますかWhat might this be?」ときかれる。ほとんどすべての被験者は本実験を空想力（Phantasie）の

検査とみなすが，無作為的絵柄の解釈はむしろ知覚（Wahrnehmung）と統覚（Auffassung）の概念に属するという。**知覚とは現存するエングラム（記憶心像）を新しい感覚複合体に連合的に同化させることである。**知覚と解釈の違いは個人的かつ連続的な性質のものであり，解釈は知覚の特別な場合であるので，ロールシャッハは，形態解釈実験を「知覚の検査」と呼ぶ正当性があるという。

『精神診断学』はテスト法のマニュアルではなく，検査手続の記載は半頁にすぎない。彼は反応の特徴を区別するために，反応領域，反応決定因，反応内容，形態水準に一連の**コード**を考え出した。新しい核心的な概念は，運動反応Ｂ（Bewegung）と色彩反応Fb（Farbe）の相互的関係を示す**体験型**（Erlebnistypus）にあり，この説明が全127頁中40％を占める。

運動反応は形態知覚と**運動感覚**（kinaesthetic）の流入によって決定されるもので，被験者は解釈された対象が動いていると表象する。運動感覚的な人は運動面で安定しているが，実際に運動が活発な人は運動感覚が乏しいという。健常者のＢの数は，知能の生産性，連合の豊かさ，新たな連合と連合の結合を成し遂げる能力とともに上昇するが，紋切り型の人には少ない。運動感覚が伸張運動（例「伸び上がっている踊り子」）か屈曲運動（例「体をかがめている」）かを調べることが重要で，**伸張的運動感覚**の人は強い自己顕示欲求をもった能動的な人，**屈曲的運動感覚**の人は受身的な人間で，あきらめきった神経衰弱者であるとした。

色彩反応は形態を考慮して，形態色彩反応FFb（例「青い虫」Ｘ図版），色彩形態反応FbF，（例「花束」Ⅸ図版），一次的色彩反応Fb（例「空」図版Ⅷ）の３群ある。色彩反応はFbFを単位として，１FbF＝1，1FFb＝½，Fb＝1½とする。一次的色彩反応Fbは衝動性を代表し，FbFは情動の変わりやすさ，怒りっぽさ，感じやすさ，被暗示性を代表し，FFｂは情動的な関係能力，周囲に対する情動的な折り合いの基盤を表す。うつ病，無感動な者，紋切り型の者，統合失調症患者のうち老いた常同化した患者と単純型の患者は色彩反応を少ししか示さない。陽性の気分変調者，神経質者，芸術家，知的障害者，滅裂な統合失調者，てんかん患者，器質性精神病者，躁病患者など，**変わりやすい情動を特徴とするすべての人は多くの色彩反応を示す。**

ロールシャッハは，ＢとFbの絶対数は内面作業ないし情動的要因を代表するものとして重要であっても，単独では不十分な代表であり，**本質的なものはそれらの相互関係である**と強調する。**運動感覚優位なＢ型**は健常か病気かは問わず，外界に順応するより自分の想念のなかに生き，内面作業の優位，集中的関係の優位，安定した情動性と運動性，ぎこちなさと不器用さ，現実への順応能力の乏しさを特徴として，**内向した**（intorvertiert）という言葉で表される人間像と一致する。ここでロールシャッハはユングの**内向**（Introversion）概念に触れて，名前だけ共有しているにすぎないと断っている。彼は内向が能動的か受動的か，固定的か流動的かにも区別しなければならないとし，Ｂ型に属している健常者は，内向したと表されるべきではなく，**内向可能**（introversionsfähig）ないし**内向的**（introversive）と表して，固定した特性ではなく，流動的な能力が問題となっていることを示唆する。**内向した状態**（Introvertiertheit）というのは内的傾向が不動で病的であることを意味する。

色彩優位なFb型は，外に向かう生き方，興奮しやすい運動性，変動しやすい情動性，現実への順応能力の豊かさ，紋切り型の知能，拡張的な関係をもつ，巧妙さと器用さなどを特徴とするが，一般的にいう**外向した**人（Extravertierte）に相当する。ここでもロールシャッハは，内向と外向の間の対立性を推測させる欠点があるとし，**外拡**（Extratension）を使用する。この対立は臨床的なものであって，心理学的なものではないという。エランベルジェは，体験型の概念にユングの類型学との共通性が何一つないことは明らかであると述べる。しかしバァッシュは，ロールシャッハはユングが『リビドーの変遷と象徴』（1913）で，対立から補完へ，反対性から補償性へと踏み出しているのを読んでいたのでないかと指摘している。ちなみにユングは，無意識が意識を補償するという考えを述べた『タイプ論』を同じく1921年に出版している。

ＢとFbが共にゼロは**狭縮（共貪）型**（Koartation）であり，こだわり屋，抑うつ的な人，うつ病，単純認知症の患者に見られる。多くのＢとFbを示す**両等（両向）型**は，天分豊かな人，強迫神経症，緊張病，躁病の患者に見られる。体験型は習性的で，安定した一つの目安になるが，気分変調や疲労その他によって影響を受けるし，個人の人生の経過の中で若干の移動もある。

ロールシャッハはＢとFbの数の比率である体験型によって，被験者が何を体験するかは知らないが，**いかに体験するか**は知ることできるとした。本法が無意識に立ち入る方法としては夢解釈や連想実験よりもはるかに劣るのは，無意識からの自由な創造を引き出すのではなく，与えられた外的刺激への順応，**現実機能**を要求するからだと説明された。

４）形態解釈実験の活用（1923）

ロールシャッハが亡くなる数週間前に，スイス精神分析学協会で行った講演原稿がオーバーホルツァーによって公刊され，**平凡反応**Ｖと**濃淡反応**（Fb）という新しい概念が紹介された。濃淡反応について，小心で慎重で不自由な情動的順応の仕方，とくに他者の前での自己統制と抑うつ的気分への傾向を示していると説明された。ロールシャッハはオーバーホルツァーの精神分析事例を本法で**盲分析**（blind analysis）して，『精

神診断学』よりも形態解釈実験と精神分析との深い結びつきを示した（中野，2004）。

ロールシャッハが心理学的，臨床的類型を数量的に示したことに大きな長所と斬新さがあるが，数量的な結果を絶対的なものと見なさなかった。ルートウィッヒ・ビンスワンガーは「ロールシャッハの研究はユングの連想実験と同じように，分析家に素早い暫定的な方向づけを与えたり，所見をあとから実験的に確証したりすることを可能にする」と評価した（Bash,1965）。ロールシャッハ法が数量的のみならず，内容面からも利用価値があることが指摘されたのである。

Ⅱ．米国における５つの学派

1970年代の米国で，心理臨床家の６割がKlopfer法，５割がBeck法，２割がPiotrowski法，１割がHertzかRapaport法で訓練されて，22%の者がスコアリングを完全に廃止していたという（Exner，1986）。これらの学派によるスコアリングの違いは主に運動反応や濃淡反応にあるが，解釈アプローチの特徴についてみていこう（Exner，1969）。

１．Klopfer法

ブルーノ・クロッパーBruno Klopfer（1900-1971）はドイツで生まれ，1933年にスイスでロールシャッハ法を学び始めた。彼は教育に貢献し，1936年にRorschach Research Exchangeを創刊し，1942年に『精神診断学』以来初めて，実施，スコアリング，解釈方法について出版した。日本では，入門書が河合隼雄によって翻訳された（Klopfer, 1962）。ロールシャッハにはない記号として，動物運動反応FM，濃淡反応K，c，k，無彩色反応C'が用いられている。

クロッパーはユングの分析的心理学と強い関わりを持つ人で，ロールシャッハ法の解釈は厳密なサイン・アプローチのできない複雑なプロセスとし，**現象学的接近法**，つまり客観的に表れた現象を主観の世界に関係づけ，「なぜ見えたのか」よりも「どのように見たのか」という内的体験を重視した。したがって，生のデータを盲分析から引き出された仮説と被検者に関する他のデータが融合されるべきだと考える。彼はロールシャッハ法で得られた特徴と実際の行動とは必ずしも一致せず，本法は無意識のうちに自分自身を明らかにして，自分では認知していない部分を明らかにすることができるとした。本法によって明らかになるという人格的側面を**表２**に示した。

現象学的接近法を発展させたシャハテルSchachtel（1966）は，ロールシャッハ反応の生成過程には，検査者に伝達するのにふさわしい反応かどうかを意識的，選択的，批判的に判別する過程があり，この過程ではテスト状況やそこでの対人関係を意識的無意識的にどのように感じているかが重要な働きをするという。つまりロールシャッハ状況は，サリヴァンがいう意味で，**対人的体験の場**であると指摘する。

日本ではKlopfer法に準拠した片口法（1987）が普及しているが，形態水準の評定が異なる。クロッパーらは潜在的な自我の強さをみる評定尺度として，ロールシャッハ予後評定尺度（RPRS）を作成し（河合，1969），片口は人格の統合水準をみるために，修正BRSを提案している（津川・中野，1991）。

表２．ロールシャッハ法により明らかにされる人格側面（クロッパー）

Ⅰ．認知的，知的側面
⑴　知的状態とその機能：知的水準，言語能力
⑵　把握の仕方：論理的，演繹的
⑶　観察力：平凡なものを見えるか
⑷　思考の独創性
⑸　生産性
⑹　興味の範囲
Ⅱ．感情・情緒的側面
⑺　一般的な情緒の傾向：抑うつ，攻撃的，現実的
⑻　自己に対する感情：内的欲求に対する反応
⑼　他人に対する反応性：ラポール
⑽　情緒的緊張に対する反応性：対処法
⑾　情緒的衝動の統制
Ⅲ．自我機能の側面
⑿　自我の強さ：現実吟味，自己評価
⒀　葛藤領域：性的役割，依存，受動性
⒁　防衛：抑圧，拒否，知性化，融通性

２．Beck法

サミュエル・ベックSmauel Beck（1896-1980）はルーマニアで生まれ，1903年にアメリカ合衆国に移住し，ハーバード大学で古典学専攻後，コロンビア大学の大学院で心理学を学び，1927年にレヴィからロールシャッハ法を知った。ベックは，人格評価が形態知覚，組織化活動，創造性，表出される情緒感のバランスの面から行えると考えた。組織化活動として**Ｚスコア**が考え出され（Beck,1961），知的機能の指標とみなした。ベック（1976）はロールシャッハの体験型から**現実体験**（Experience Actual：EA）という概念を考え出した。現実体験は色彩反応総数ΣCと運動反応Mの総和であり，それは自由な感情表出の全量を示し，外界に反応する感情の豊かさを表している。あらゆるMはある概念に働きかける情動的なエネルギーによって生じるので，Mは情動であり，色彩反応Ｃと結びついた１つの心理的結実である。現実体験とは，Ｃの中の情緒とMの中の情緒を加えたものであるという。

ベック（1976）は，臨床的観察とロールシャッハ上の観察から，**表３**のような５つの根源的特性を抽出し，

各特性はさまざま諸行動の源であるとした。ベックはテストに表れる行動はMやCであるが，それらは生活場面で観察可能な行動となって現れるとみるもので，行動主義の考えをもつ。

ベック法のスコアリングは，Rorschachの原法に最も忠実で，FMやmを認めない。陰影決定因については，遠近が強調される通景反応をV（Vista），拡散反応をY，材質反応をT（Texture）と記号化した（Beck, 1976）。通景反応Vの一般的意味は劣等感であるが，４つの主題にわたる。すなわち，①遠景，険しい風景，高い山を含む。②建造物で，内的な不全感を示唆する。③孤立した風景，通常は水に囲まれた島で，孤独感から生じている。④反射で，自分を評価して欲しいという欲求と解釈される。Y反応は無気力状態によって生じ，元気がなく疲れきった人に特徴であるという。材質反応は，クロッパーを手本にして，子どもまたは成人のうちに存続している幼児期からの愛情飢餓を表すという。

ベックの解釈は実証主義的にスコアリングのデータを集積して，**法則定立的**（nomothetic）なアプローチを用いる。しかし一人の人間に関する最終的結論は**個性記述的**（idiographic）な事例研究に従う（Beck, 1961, 1978）。彼は盲分析を重視したが，晩年に現象学な解釈も認めた（Exner，1969）。

表３．顕在特性Trait Manifestations（ベック）

Ⅰ．防衛	**Ⅳ．感情状態**
A　萎縮的	A　不安定
B　病因的	B　固定的
C　適応的	C　統制された解放
Ⅱ．連想の統合性	**Ⅴ．社会適応**
A　秩序的	A　自己に心を奪われている
B　分裂的	B　自己剥奪的
Ⅲ．空想活動	C　建設的な生活目標
A　自閉的	
B　退行的	
C　僅少または皆無	
D　潜在的創造性	

３．Piotrowski法

ジグムント・ピオトロフスキーZygmunt Piotrowskiは1904年にポーランドで生まれ，数学と実験心理学を学んだ後，1931年にアメリカに渡った。彼は客観性を重んじ，初期は器質疾患に関するもので，**脳器質疾患指標**（orgnic signs）を仮定した。彼は特定のパーソナリティ理論を適用することに反対し，クロッパーの包括的な現象学とベックの客観的な行動主義の中間の立場を取り，**知覚分析**（Perceptanalysis）を提唱した。ピオトロフスキー（1957）は，ロールシャッハ法が人格把握のための優れた知覚分析技法を可能とするもので，内容としての言語を分析することよりも，知覚像（percept）のもつ形式的な特徴の方が信頼性があるとした。彼は**要素間の相互依存の原則**（Principles of Interdependence of Components：PIC）を提起した。これは人格が1つの知覚分析的要素によって，あるいは多くの要素によっても記述され得るものではなくて，各要素の強さと要素間の関連性によってのみ記述されるというもので，**サイン解釈法**を生んだ。

例えば，反応決定因は環境からの刺激に対する反応の選択性の程度に並べると，M FM m c' Fc' F Fc c FC CF C（c'は暗色･黒色反応，c は灰色の陰影反応），の順となる。Mは相対的に最高度に選択的な反応で，心理社会的における役割の原型や物事の処理法と密接に関連する。C反応は周囲の刺激に対する無選択な反応である。MがΣCよりも大となれば，内的な動機づけによって行動し，他人の評価にさほど左右されず，技能の習得は遅いが訓練効果は持続する。Σcが大きくなれば，内的衝動を行動化するのを自制する傾向が強くなる。Σc＜ΣCであれば，制御力が相対的に弱い，などとみる。

知覚分析においては，個人の症状や歴史についての予備知識無しに行う盲分析は，優れた訓練法として奨励されている。ピオトロフスキーは主観的な解釈を排除するために，知覚分析データをコンピューター・プログラム化する努力も行った。

４．Hertz法

マーガレット・ハーツMarguerite Hertzはロールシャッハ資料を焼失したために，モノグラフがないが教育家として貢献した。彼女は標準化が可能な面は標準化すべきだという考えをもち，普通部分反応，形態水準，平凡反応（６名中１名の割合で出される反応），独創反応（100名中１名の割合で出される反応）のスコアリングのための頻度表を最初に作った人である。彼女の研究のほとんどが子どもや青年を扱ったものであった。ハーツは，陰影反応はKlopfer法から，内容分析はRapaport-Schafer法から取り入れ，クロッパーとベックとの間をつないだ人でもある。また，彼女はピオトロフスキーがコンピューターによって統計的に処理して解釈しようとするのに対して，生育史を含めて総合的な**臨床的アプローチ**を認めることが妥当性にとって必然的であると主張した。

５．Rapaport-Shafer法

デヴィト･ラパポートDavid Rapaport（1911-1960）はハンガリーで心理学を学んだ後，シルダーSchilderの下で精神分析を経験しており，1938年に米国に移住したが，既にロールシャッハ法の経験を積んでいた。メニンガー財団にいるとき，Rapaport-Shafer法の基礎を完成させた。彼は本法で生じる思考活動の障害を**逸脱言語表現**（deviant verbalization）と命名して包

括的に研究した（中野，2010）。心理判定ではロールシャッハ法の他に，知能検査や主題統覚検査（TAT）などの検査からなる**テスト・バッテリー**を用いるべきだと主張した。ロイ・シェイファーRoy Schafer（1948, 1954，1967）はラパポートに出会ってロールシャッハ法を手がけ，**精神分析的解釈**を著した。

Rapaport-Schafer法では，被検者は検査者と面と向かって坐り，各図版毎に伏せたままで質疑が行われる。スコアリングは主として自由連想に対して行われ，スコア中心の因習を打破して，**言語分析**が重視される。ラパポートは，言語内容は非常に**個性記述的**なもので，その個人の理解にはもっとも適切な資料であるとして，「あなたがそう思ったのは，カードのどの辺からですか，カード上のどんなところからですか」と質疑するかわりに，「なぜこのように見えるのですか，なぜこうだと思ったのですか，ときく方がよい」という。これに対してクロッパーは「なぜ・・・を見たのですか，ときくことにより，被検者にその反応に対する責任を負わすようにしむけてはならない」と反対する。シェイファーは**反応継起**（sequences）を重視し，同時にテスト状況における検査者と被検査者の力動関係も見逃さない。本法は自我心理学の立場から，防衛分析や主題分析が行われ，投影の本来の意味を追究したといえる（中野，2004，2005）。日本では，小此木・馬場（1989）がこの方法を発展させた。

Ⅲ．包括的システム

包括的システムはジョン・エクスナーJohn Exner（1929-2006）がこれまでのシステムを統合したもので，1974年に出版され，その後30年間に多くの変更や追加がなされた。Exner（2003）は60以上の変数，比率，パーセント，指標の基礎となる，およそ100の変数の頻度を組織的に示した。Exnerは元来ベック派の流れをくむ人で，反応領域，決定因，形態水準，反応内容などから**構造分析**を行う。さらにPTI（知覚と思考の異常），DEPI（抑うつ指標），CDI（対処力不全指標），S-CON（自殺の可能性），HVI（警戒心過剰指標），OBS（強迫的スタイル指標）という６つの**特殊指標**（special indices）が算出される。人格の特徴は，①統制力とストレス耐性，②感情の特徴，③認知的媒介，④思考，⑤情報処理過程，⑥対人知覚，⑦自己知覚，という７つの**基本的クラスター**に分けられ，それを説明する変数が割り当てられている。クラスター解釈の順番はいつも同じではなく，12の鍵変数があって，影響力の大きいクラスターから検索できる。包括システムは1990年代には，ロールシャッハを教えるアメリカの大学院課程の75％で教えられるようになった。

包括システムは明確に法則定立的アプローチを打ち出し，有望な**心理測定**の道具として大いに期待された。しかし，ウッドら（Woodら，2003）が指摘するように，アメリカ以外の国で得られたスコアと包括システムの基準が合わないことが明らかになった。筆者らもこれを確認している（津川・浜田・中野，1997；笠井・津川・中野，1998）。また，包括システムワークブック（Exner，2001）の中で，以前とサンプル数が700人から600人に減ったのは，成人非患者の記録の中で200以上の記録が重複したからだと説明された。つまり，法則定立的アプローチにとって基準サンプルの信頼性の乏しさは致命的である。

ウッドら（2003）は精神医学的診断とロールシャッハ・テストの関係に関する数百の研究を論評した結果，少数の肯定的知見はあるが，ロールシャッハ・テストは診断ツールとしてはほとんど妥当性を持たないと結論した。こうした批判に対して，エクスナー（2003）は，クラスターの要約を単純に並べるのは，実際の人物の全体像を引き出すには不十分であり，テストを受ける人に関する知識，パーソナリティ理論の知識，精神病理や不適応の理論が重要であると述べる。

Ⅳ．施行法について

施行法（administration）も統一されていなかったので，Exner（2003）の見解を中心に述べておきたい。

１）検査前

被験者がロールシャッハ法で何を知りたいのかというニーズを中心にして個人的状況を聴取する。ロールシャッハ法，ウェクスラー式知能検査，MMPIをテスト・バッテリーとして使用する場合，アセスメントの全過程が３時間以内になるように，疲労に配慮する。施行する前のウォーミングアップとして，ピオトロフスキーは人物画を実施したが，筆者は「風景構成法」（中井久夫創案）を使用する。

２）座る位置

エクスナーはロールシャッハ，クロッパー，ハーツと同じく，対面では座らず横並びを推奨する。この理由は，①被検者に影響しそうな検査者の不注意で不必要な手がかりを減らせる，②被検者が言及するブロットの特徴をよりよく観察できるとした。なお，ベックはクライエントの後ろに座るのを好み，ラパポートは対面法を採用した。

３）導入と教示（instruction）

ロールシャッハ・テストの性質について特に詳しく被検者に説明する必要はないが，被検者がインク・ブロットを初めて見るならば，「何枚かのインクのしみを見せて，それが何に見えるかをお尋ねします」「その人の性格特徴についての情報が得られるテストです」などと説明する。被検者に図版Ⅰを手渡しながら，「これは何に見えますか」と尋ねることで始め，基本的にこれ以上何も付け加える必要がない。

４）自由反応段階（performance proper）

反応はできるかぎり逐語的に，略語を工夫しながら効率的に記録する。エクスナーは反応時間を計測しないが，継起分析する際には計測は役に立つ。検査中の質問には，「ご自由にどうぞ」と答える。被検者が図版を手にもたなければ,「どうぞ持って下さい」と促す。被検者が「いくつ見えないといけないのですか」と質問すれば，「ゆっくりご覧になってください。時間をかけるともっと見えると思います」と答える。被検者が図版Ⅰに１つだけ反応して図版を返そうとすれば，「ゆっくりご覧になってください。他にもいくつか見えると思います」と促す。

総反応数Ｒが13以下の場合，エクスナーは信頼性がなく解釈の妥当性にかけるとして，質問段階に移らず，「最初から見ていただいて，今度はさっきよりも多く答えてください」とやり直す。しかしこの方法は被検者の状態を考慮する必要がある。長い記録の場合，被検者が図版Ⅰに５つ反応し，さらに反応しようとすれば，検査者は図版を取り上げて，「いいですよ。次にいきましょう」と介入する。同じ被検者が図版Ⅱでも５つ反応したら，同じ方法を取り続ける。しかし，ある図版で４つ以下であれば，その後の介入はしない。

５）質問段階（inquiry）

この段階はすでに得られている情報を見直し，明確化するためのものである。エクスナーは，「では，もう一度最初から見てみましょう。そんなに時間はかかりません。答えてくださったものを私も同じように見ているのか確かめたいのです。これから１つずつ私が読みあげますから，それがこの図版のどこに見えて，どこからそう見えたのか教えて下さい」と説明する。領域が曖昧な場合，指でまわりをなぞってもらう。直接的，誘導的な質問は避け，感想なのか反応のかわからない場合は，「答えとしておっしゃったのですか」と尋ねる。なお，エクスナーは追加反応を認めない。

６）限界吟味段階（testing-the-limits）

クロッパーが提唱した限界吟味段階は，反応過程において反応が分類されたが，拒否されて言語化しなかった可能性を検証するために考案されもので，コード化しない。平凡反応が非常に少ない場合，特に精神病患者の場合には，よく見られる対象を分類できなかったのか，単に述べなかったのかを確認する。「人によってはここに・・・を見ます。何かそのようなものは見えますか」と尋ねる。再検査する可能性がある場合，限界吟味段階はしない方がよい。

７）検査後

Most liked/disliked cardや「あなたを含めて，家族のそれぞれのイメージに合う図版を選んでください」と尋ねて father/mother/self image card などを選んでもらうと解釈に役立つ。 興味をもって終わる人もいるが，極度な不安や疲労感で終わる場合は，それを手当する必要がある。

８）フィードバック面接

検査結果の返し方であるが，フィン（Finn, 1996）は，検査所見をいわば共同制作する，あるいは修正するために，クライエントに関与してもらう**治療的アセスメント**を提案している。この面接では，検査前に話し合った，回答すべき問いに答えなければならない。クライエントが肯定するのなら，具体例を求め，拒絶するのなら，解釈のどこかしっくりくる部分を尋ね，追加的情報を集めるようにクライエントに求める。この面接の後に，最終的レポートを作成する。

Ⅴ．おわりに

ロールシャッハ法の解釈は，客観的な心理測定を目指す**法則定立的**なアプローチと，臨床的に被検者個人の世界を明らかにしようとする**個性記述的**なアプローチがあり，歴史的にみればこの両面が振り子のように揺れてきた。ロールシャッハはデータをコード化して「体験型」という新しい心理的概念を作り出し，構造的な分析を重視した。しかし彼には精神分析志向があり，個性記述的方法の可能性を示した。その後，法則定立的優位なベック法と個性記述的優位なクロッパー法が争う中で，エクスナーが両者を「包括システム」として統合し，多量なデータを駆使して診断ツールとしての可能性を示した。エクスナー（1995）が作成した形態水準表は，日本人の形態水準表の作成を促し（高橋ら，2009；松本ら，2009），ロールシャッハ法の入門者に大きな利益をもたらした。しかし法則定立的アプローチは，正確にコードできることが要求されるだけでなく，世界共通の包括システムの基準となるデータがないことが明らかになった。

ロールシャッハ法は絵をみて言葉にするものであるので，思考の多様性や障害を鋭敏に拾うツールである。ロールシャッハ法が診断検査として有用なのは，**思考障害**の査定であるが（Kleiger，1999），正常な人を病気とみる**過剰病理化**の傾向があることも忘れてはならない（Woodら，2003）。

ロールシャッハ法は，**事例研究**のように個性記述的アプローチを用いれば，個人の理解と援助方針の検討にその魅力を遺憾なく発揮する。そのためには人格理論や精神病理の学習は不可欠であり，ロールシャッハ法はこれを使用する者の理論に応えてくれる貴重なツールなのである。

参考文献

Hermann Rorschach関連

1）Rorschach H（1921）: *Psychodiagnostik − Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments*. Bern: Verlag Hans Huber.（*Psychodiagnostics: A Diagnostic Test Based on Perception*. trans. Lemakau P & Kronberg B, New York: Grune & Stratton）鈴木睦夫訳（1998）：新・完訳　精神診断学　金子書房

2）Bash KW（ed.）（1965）:*Herman Rorschach: Ausgewählte Aufsätze*. Bern: Hans Huber. 空井健三・鈴木睦夫訳（1986）：ロールシャッハ精神医学研究　みすず書房

3）中井久夫編訳（1999）：エランベルジェ著作集１―無意識のパイオニアと患者たち．みすず書房

4）包括的システムによる日本ロールシャッハ学会編（2005）：ロールシャッハとエクスナー―ロールシャッハ・テストの起源と発展　金剛出版

Klopfer関連

5）Klopfer B, Davidson HH（1962）：*The Rorschach Technique：An Introductory Manual*. Harcourt, Brace & World. 河合隼雄訳（1964）:ロールシャッハ・テクニック入門　ダイヤモンド社

6）片口安史（1987）：新・心理診断法　金子書房

7）片口安史監修（1993）：ロールシャッハ・テストの学習―片口法スコアリング入門　金子書房

8）河合隼雄（1969）：臨床場面におけるロールシャッハ法　岩崎学術出版

9）Schachtel EG（1966）：*Experiential Foundations of Rorschach's Test*. New York：Basic Books. 空井健三・上芝功博訳（1975）：ロールシャッハ・テストの体験的基礎　みすず書房

10）津川律子・中野明徳（1991）：ロールシャッハ・テストにおける修正BRSの検討―BPRSと比較して．心理臨床４(3)：189-198,

11）高瀬・佐藤・波田野・藤岡編（2008）：RODS（Rorschach Data System）（Win Vista対応）　金子書房

Beck関連

12）Beck　SJ　et.al（1961）：*Rorschach's Test. Basic Processes, Third Edition*. New York: Grune & Stratton.

13）Beck　SJ, Beck AG（1978）：*Rorschach's Test. Gradients in Mental Disorder, Third Edition*. New York: Grune & Stratton.

14）Beck　SJ（1976）：*The Rorschach Test.:Exemplified in Classics and Fiction*. New York: Stratton　Intercontinental Medical Book.　秋谷たつ子・柳朋子訳（1984）：ロールシャッハ・テスト―古典文学の人物像診断　みすず書房

15）辻　悟（1997）：ロールシャッハ検査法　金子書房

16）辻　悟・福永知子（1999）：ロールシャッハ・スコアリング―阪大法マニュアル　金子書房

Piotrowski関連

17）Piotrowski ZA（1957）: *Perceptanalysis*.　上芝功博訳（1980）：知覚分析　新曜社

18）岡堂哲雄・矢吹省司（1976）：ロールシャッハ・テスト入門　日本文化科学社

19）村上宣寛・村上千恵子（1991）:ロールシャッハ・テスト―自動診断システムへの招待　日本文化科学社

Rapaport-Shafer関連

20）Rapaport　D, Gill　MM, Shafer　R（1968）：*Diagnostic Psychological Testing*.　New York: International Univ. Press.

21）Shafer R（1948）：*The Clinical Application of Psychological Tests*. New York: International Univ. Press.

22）Shafer R（1954）：*Psychoanalytic Interpretation in Rorschach testing*. New York: Grune & Stratton.

23）Shafer R（1967）：*Projective Testing and Psychoanalysis*. New York: International Univ. Press.

24）小此木啓吾・馬場禮子（1989）：精神力動論―ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合　金子書房

25）馬場禮子編（1983）：境界例―ロールシャッハテストと精神療法　岩崎学術出版

26）馬場禮子（1995）：ロールシャッハ法と精神分析―継起分析入門　岩崎学術出版.

27）馬場禮子（1997）：心理療法と心理検査　日本評論社

28）Lerner,PL（1998）：*Psychoanalytic Perspectives on the Rorschach*..　Hillsdale, NJ: Analytic Press.　溝口純二・菊池道子他監訳（2002，2003 ）：ロールシャッハ法と精神分析的視点（上・下）金剛出版

29）Kleiger, JH（1999）：*Disordered Thinking and the Rorschach*. NJ: Analytic Press. 馬場禮子監訳（2010）：思考活動の障害とロールシャッハ法　創元社

30）森田美弥子他（2010）：実践ロールシャッハ法　思考・言語カテゴリーの臨床的適用　ナカニシヤ出版

31）中野明徳（2004）：ロールシャッハ法と精神分析―継起分析と防衛解釈を中心に．福島大学教育学部論集（教育心理部門），77，21-36.

32）中野明徳（2005）：ロールシャッハ法と精神分析（その２）―内容分析を中心に．福島大学人間発達文化学類論集（教育心理部門），２，19-34.

33）中野明徳（2010）：ロールシャッハ法における言語表現の分析方法―思考障害の評価とその発展．福島大学総合教育研究センター紀要，８，1-9.

Exner関連

34）Exner　JE（1969）：*The Rorschach systems*. New York: Grune & Stratton.　本明寛監訳（1972）：ロールシャッハ・テスト―分析と解釈の基本　実務教育出版

35）Exner JE（1974）：*The Rorschach: A Comprehensive System, Vol.1*.　New York：John Wiley & Sons

36）Exner JE（1978）：*The Rorschach: A Comprehensive System, Vol.2：Current Research and Advanced Interpretation*..

New York：John Wiley & Sons
37）Exner JE（1986）：*The Rorschach: A Comprehensive System, Vol.1: Basic Foundations*（*2nd Edition*）. Rorschach Workshops. 高橋雅春他監訳（1991）: 現代ロールシャッハ・テスト体系（上，下） 金剛出版
38）Exner JE（1990）：*A Rorschach Workbook for the Comprehensive System, 3rd Ed.* Rorschach Workshops. 小川俊樹他監訳（1992）：ロールシャッハ・テスト ワークブック 金剛出版
39）Exner JE（1991）：*The Rorschach: A Comprehensive System, Volume 2：Interpretation*（*Second Edition*） 藤岡淳子他訳（1994）：エクスナー法 ロールシャッハ解釈の基礎 岩崎学術出版
40）Exner JE（1993）：*The Rorschach: A Comprehensive System, Vol.1：Basic Foundations*（*3rd Edition*）John Wiley & Sons
41）Exner JE（1995）：*The Rorschach: A Comprehensive System, Vol.3：Assessment of Children and Adolescents*（*Second Edition*）New York：John Wiley & Sons
42）Exner JE（2000）：*A Primer for Rorschach Interpretation.* 中村紀子他監訳（2002）：ロールシャッハの解釈 金剛出版
43）Exner JE（2001）：*A Rorschach Workbook for the Comprehensive System*（*Fifth Edition*）. 中村紀子他（監訳：ロールシャッハ・テスト ワークブック（第５版） 金剛出版
44）Exner JE（2003）：*The Rorschach: A Comprehensive System, Vol.1：Basic Foundations and Principles of Interpretation*（*4th Edition*）John Wiley & Sons 中村紀子・野田昌道監訳：ロールシャッハ・テスト 包括的ススステムの基礎と解釈の原理）金剛出版
45）Exner JE（1995）：*Rorschach Form Quality Pocket Guide.* 中村紀子他訳（2002）：ロールシャッハ形態水準―ポケットガイド（改訂版） エクスナー・ジャパン・アソシエイツ
46）Weiner IB（1998）:*Principles of Rorschach Interpretation.* New Jersey: Laurence Erlbaum Associates. 秋谷たつ子他訳（2005）：ロールシャッハ解釈の諸原則 みすず書房
47）Tara R, Kaser-Boyd N, Maloney MP（2001）：*Essentials of Rorschach Assessment.* John Wiley & Sons 小川俊樹監訳（2005）：基本からのロールシャッハ法 金子書房
48）Wood JM, Nezworsuki MT, Lilienfeld SO, Garb HN（2003）：*What's Wrong With The Rorschach? Science Confronts The Controversial Inkblot Test.* John Wiley & Sons 宮崎謙一訳（2006）：ロールシャッハテストはまちがっている 北大路書房
49）Finn SE（1996）：*Manual for Using the MMPI-2 as a Therapeutic Intervention.* University of Minnesota Press. 田澤泰弘他訳（2007）：心理査定フィードバック面接マニュアル 金剛出版
50）高橋雅春・西尾博行（1994）：包括システムによるロールシャッハ・テスト入門 サイエンス社
51）藤岡淳子・中村紀子他（1995）：エクスナー法によるロールシャッハ解釈の実際 金剛出版
52）津川律子・浜田さつき・中野明徳（1997）：ロールシャッハ・テストの包括的システムにおけるうつ病指標および対処力不全指標の分析．心理臨床学研究，15(4)，361-370.
53）笠井さつき・津川律子・中野明徳（1998）：包括システムによるロールシャッハ・テストにおける精神分裂病指標（SCZI）の分析．包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌，２(1)，52-59.
54）高橋雅春・高橋依子・西尾博行（1998）：包括システムによるロールシャッハ解釈入門 金剛出版
55）藤岡淳子（2004）：包括システムによるロールシャッハ臨床 誠信書房
56）小川俊樹・松本真理子（2005）：子どものロールシャッハ法 金子書房
57）高橋雅春・高橋依子・西尾博行（2006）：ロールシャッハ・テスト実施法 金剛出版
58）高橋雅春・高橋依子・西尾博行（2007）：ロールシャッハ・テスト解釈法 金剛出版
59）高橋雅春・高橋依子・西尾博行（2009）：ロールシャッハ形態水準表 金剛出版
60）松本真理子・森田美弥子監修（2009）：子どものロールシャッハ反応 形態水準と反応内容 金剛出版
61）高橋依子（2009）：ロールシャッハ・テストによるパーソナリティの理解 金剛出版
62）中村紀子監修（2010）：ロールシャッハ・テスト Sweet Codeコーディング・システム 金剛出版
63）中村紀子（2010）：ロールシャッハ・テスト講義Ⅰ基礎編 金剛出版